「**未完成**」脚本

# 第０幕

## **シーン１**

|  |
| --- |
| 朝-昼・事故現場１ |

 [ゆっくり止まっていく心音のSE]

吹き飛ぶサイドミラー。

落下するマジックテープ財布、原付免許。

ガードレールに引っかかり、車輪だけが回転している自転車。

割れた『未完成』MD、近くに落下するサイドミラー。

空に向かって伸びる電信柱。

[回転する空] [雅之(18)の目アップ]

雅之が手を伸ばす。

その先に、地面に投げ出された婚約指輪がある。

[カメラ、追うように撮影]

心音が停止、暗転。

## シーン２

|  |
| --- |
| 時間帯不問-明里の家（学生時代） |

自室で勉強している明里。

制服姿のまま、机に向かっている。

傍にあったガラケーが着信を告げる。

明里、携帯をとり、ややあって驚く。

[引きで背後から撮影し、その後顎から下だけを撮るような横接写カット]

赤本の上に、開いたままの携帯を落とす。

# 第１幕

|  |
| --- |
| 第１幕は5月ごろの想定。基本同窓会シーンなので、同日設定で服装統一。 |

## シーン３

|  |
| --- |
| 日中帯-明里の家 |

前カットと同様の角度で、医療機器関連の本の上にあるスマートフォンを映す。

アラームがなり、明里がスマホを取る。

明里、荷物を通勤カバンに入れて、玄関へ向かう。

[手→玄関に向かう様子をやや引きで横から撮影]

部屋から、パジャマ姿の夫が出てくる。

明里「あ、おはよー」

夫は目も開き切っておらず、だるそう。

夫「早いなー。なんかあんの？　飯はー？」

明里「今日は朝早いから、自分でなんとかしてって言ったじゃん」

夫「そうだったっけー（だるいのでやり合うのは避ける感じ）」

明里、ため息をついて「行ってきます」とそのまま玄関を出る。

夫、のそのそと動き、冷蔵庫を開ける。

[内側から夫の顔を撮るようなショット]

少し調理すればすぐに朝食にできそうな食材は入っている。

夫「……ウーバー頼むかぁ」

## シーン４

|  |
| --- |
| 朝方-事故現場１&花屋 |

○花屋遠景。（次に花を選ぶ手を、顔が入る程度の近さで横から撮影←撮影許可取れたら）

明里、花束を手に出てくる

[出てくる明里のカット]

[歩いている明里の手にしている花束をアップ]

[花束経由で場所切り替え]

雅之の事故現場に着いた明里、驚いて立ち止まる。

明里の視線の先で、透が花を手向けている。

[透をカメラ側に配置し、透の向こうに明里を映すような形で撮影]

明里「あ……」

[明里目線で透を撮影]

透、立ち去ろうとした際に誰かがいることに気づく。

逡巡するも振り返らずに、そのまま歩き始める。

明里、透に声をかける。

明里「とお、る……？　透だよね！」

 透、声の方に振り向く。[懐かしい声に古情が蘇ったか？]

[透の表情アップ][サントラ開始]

透「明里か？」

明里「やっぱり！　久しぶり！　元気？」

透「おう。まあな……」

駆け寄る明里。

透もためらいつつ曖昧に微笑み、ふと明里の花束に目を移す。

透「……あ、ダリア」

[自分の話題にならないようにという意図。目を泳がせたり、手をぶらぶらさせたりして狼狽えている]

明里「え？　あ、ああ、うん」

透「マサに？」

明里「そうそう。もう、１０……１２年前、か。もう、いいかな……とは思うんだけど。やっぱり、ね」

花束はすでに一つ置かれており、その隣に、明里のものも並ぶ

 [花束のカット]

明里「毎年私のほかに１束だけあるからさ、お母さんかな、と思ってたんだけど、一昨年亡くなったし……透だったんだね」

透「まあな 」

明里「しょっちゅう2人で遊んでたもんね」

透「あいつ、家支えるために高校辞めて朝から晩まで働いてたくせによ、ちょっと休みが取れりゃ『いついつ空いてるか？』なんて電話かけてきやがる。『明里と遊んでやれ』って何回言ったと思ってんだ」

明里「ふふ。『透は寂しがり屋だから』って、マサよく言ってたよ」

透「余計なお世話なんだよ。まぁ良いやつほど早く死ぬっていうが、不憫な奴っつーか……」

沈黙（２－３秒）

透「悪い。湿っぽくなっちまって。」

明里「ううん。透は今はなにしてるの？　まだこの辺に住んでるの？」

透「ああ……うん、まあ、な」

透、言葉に詰まる。会社を辞めて、もうすぐ失業給付が終わる状況なので、なかなか話せない。その時、明里の携帯が鳴る。

明里「あっ。ごめん」

透「仕事？」

明里「うん。今日は夜まで仕事入っちゃって。でも、そのおかげで会えたもんね」

明里、手を振って走り去ろうとする。透も手を振る。

明里、慌てて立ち止まって振り返り、透に声をかける。

明里「そうだ。今度同期会あるからおいでよ！　会って言っても私とさっちゃんと健太の3人だけど……ふたりとも元気してるよ」

透「おお、中学のメンツ、全然会ってねえなあ」

透も懐かしい名前に喜び、会話に乗り気になる。少し笑顔を見せる。

明里「あのころギリギリLINEなかったから、連絡途絶えちゃうよねえ。交換しよ」

透「（スマホを出して）あ、ごめん。今スマホの充電が」

明里「あ、そうなんだ。じゃあ場所だけ。えっと……（スマホを開く）4日の19時に天久保駅！　空いてる？」

透「うん。たぶん……4日の、19時ね」

明里「天久保駅前！　もう行かなきゃ……じゃあ、またね！」

[透、いきなりたくさん情報が入ってうろたえている]

明里が走り去ってしまうので、透、ひとまず手を振る。

透はふたり分の花束を揃えて、去る。

[ローアングルで、花束から歩き去る透の足。そのまま花束を映す]

タイトルイン『未完成』

サントラ終了

## シーン５

|  |
| --- |
| 夜-居酒屋１ |

一同「かんぱーい」

明里、早希、健太、透が店おり、ビールで乾杯する。

座敷席の脇に置かれた靴はさまざまで、透のスニーカーだけボロボロである。

健太「いやー久しぶりだね」

明里「マサにお花供えに行ったときに、さ。偶然会えちゃって」

早希「よくわかったね。最後に会ったのって……」

一瞬、場が静かになる。

透が即座に、

透「マサの葬式のときだな17、……いや、18か」

透、ビールをあおる。

明里「そう、だね」

透「みんな元気で安心した」

再びの沈黙。

早希「まあ、元気は元気かな。でもまあすっかり全員、会社の歯車になり果てたね」

明里「さっちゃんは人を動かす側でしょー、プランナーなんだから」

早希「上のおじさんのご機嫌取りばっかりよ」

明里「それはうちもあるなあ……健太は順調？」

健太「順調だよ。こないだ新しい保険が出たから、積極的に案内してるんだ」

早希「あんたがノルマ達成できてるのいまだに信じらんない」

健太「みんなに不安なく人生を生きてほしいからね。頑張ってるよ」

早希「はいはい」

早希、呆れる。明里、透を見る。

明里「透はなにしてるの？」

透、バツの悪そうな顔をする。

透「俺か？　俺はまあ、ぼちぼちだよ……うん」

明里「そっか……」

再びの静寂。

ふと、グラスを置いた明里の指に、結婚指輪がひかる。

透「明里、結婚してたんだな」に

明里「え？　ああ……うん。そうそう。３年前にねー」

透「おめでとう」

明里「ありがとー。いや～想像してた倍くらい疲れるんだよ、これが」

早希「だからダメって言ったのに。面倒見の良い母親に育てられた男はね、絶対手を焼くんだから」

明里「ははは。今まさにそれを実感してるよー」

透「いいじゃん。１人で生きるにゃ人生長すぎるからな。いや、まあ、とにかくめでたい。一杯おごらせてくれ！」

明里「やったー、って飲みほじゃん」

透「ばれたか」

透、店員を呼び、酒を頼む。

[健太と早希にカットを映す]

健太「１人で生きるには人生長すぎるって。早希」

早希「あんたとは絶対やだ」

笑う明里と驚く透。

透「なんだお前。まーだ早希にアタックしてんのか」

明里「早希かわいいからなー」

早希「これ一歩間違ったらストーカーだよ」

健太はいたって真剣に、

健太「仕方ないだろ。好きなんだから」

透、やや滑舌が緩く、声が大きくなる。

透「変わんねえなーお前ら……（視線を落とす。自分の境遇を対照して落ち込む感じ）（その後奮い立たせて）よしっ。今夜はたらふく飲もう。なあ」

[画面、ディゾルブ。月を映す]

## シーン６

|  |
| --- |
| 夜-道 |

夜の町を歩く４人。透は千鳥足で、健太に担がれている。

透「はーすまんなー」

明里「飲み過ぎだよーもう。はい、水飲んで」

透「助かるー。うえっ」

透、水を飲もうしようとして、道に嘔吐しかけてしゃがむ。

透、転んで打撲。

明里「うわっ大変」

慌ててペットボトルの水で傷口を洗う。

早希、少し進んだところで振り返り、声をかける。

[深く立ち入りたくないので、扶助をアウトソーシングする感じ]

早希「ひどそうだったら明日医者行きなよ」

透「ほ、へんしょー」

明里「へ？」

透「保険証、ないから……」

早希「嘘！　失くしたの？　ありえない」

透「あ、あるけど……ない……」

健太「大丈夫だよ。健康保険は皆保険だから、払ってない人でも救済措置あるから」

 [健太の職業病が出るシーン]

明里「と、とりあえずお医者さんのことは明日考えるとして、家まで運ぼ」

再び立ち上がる透、健太の肩に支えられて歩く。

歩いて行く４人。

早希が足早に進み、健太は透を担ぎ、明里は透の分の荷物を持ってついて行く。

画面、暗転。

## シーン７

|  |
| --- |
| 夜-透の家 |

ドサッと倒れこむ音。

暗がりの部屋に倒れ込む透。

[徐々に映す]

透「げほげほ」

明里と健太、透の近くで看病する。

明里、かがみ込んでペットボトルを置き、少しだけキャップを緩めてあげる。

明里「家着いたよ。水、ここに置いとくから。ちょっとずつ飲んで休んでね」

早希、家に入らず玄関から様子を見ている。

早希「３０近いんだからそのくらいはわかってるでしょ」

[カット：透の表情に]

透「すまねえ。すまねえなあ。でも、会えてよかったよお」

透、目をつむる。

健太「……ぼくも会えてよかったよ」

透の近くで屈んでいた健太、立ち上がろうとする。

足が部屋の大五郎(ペットボトル)に引っかかり、缶や瓶(ワンカップ)が倒れる。

健太「わっ」

床には大量の瓶がある。

部屋の隅には馬券の山もある。

[映せると良い小道具・未開封の封筒/チラシと一緒くたにされたカード会社の明細/水道光熱費の督促状/丸まった靴下/コップがたくさん置いてある、コンビニのレジ袋をそのままゴミ袋にしていて箸が出ている]

透「いいって。あとで片付けるから。終電終わるぞー」

健太が腕時計を確認すると、xx時だ。

[腕時計を映す]

明里は心配そうに透を見つめている。

健太「わかった。ごめんね。またね」

早希「なんであんたが謝るのよ。行こ」

健太、早希、先に部屋を出る。

後から明里が追いかけ、チラッと透を振り向く。

[サントラ開始]

開けたドアには、税金や保険料の未納書類が挟まっている。

机の上にある解雇予告通知、MDを映す。

暗転。

⭐︎保険でMDの『未完成』文字をアップで撮影しておく。タイトルイン候補２。

## シーン８

|  |
| --- |
| 夜-道 |

明里、駅に向かう道で二人に声をかける。

明里、少し(10秒ほど)間を置いて

明里「……ねえ、ほんとにこれで帰っちゃっていいのかな」

健太、早希、足を止める。

早希、少し呆れながら振り返り、

早希「ほら、そうやって甘やかすから、毎度男がダメになっちゃうんでしょ……」

早希、明里と目があう。

明里は真剣に言う。

明里「私、やっぱり透をこのまま放っておいちゃいけない気がする。みんなで手伝ってあげよ。これから。このままほっといたら、きっと後悔すると思う。どこかで」

早希「うわ……マジで……？」(\*ドン引き)

沈黙する早希と健太。

[ふたりを交互に映した後、明里のアップ]

明里「……忙しいならいいよ。私ひとりでも、やるから」(\*少し意地を張っている)

明里と早希、しばらく見つめ合う。

少し間があって、早希の後ろにいた健太が口を開く。

健太「よっしゃ、一肌脱ぐか！」

明里は嬉しそうに微笑む。

健太、明里に近寄る。

早希は呆れて目を閉じ、溜息をつく。

が、少し頷く。

[サントラ終了]

# 第２幕

|  |
| --- |
| 第２幕は6月ごろ想定。服装は日付ごとに合えば問題なし。 |

## シーン９

|  |
| --- |
| 日中-透の家 |

昼下がりの町を映す（保険カット）。カーテンの隙間から日が射している。

カーテンがこすれる音とか鳥の鳴き声。

透「痛ってえ……」

家で腕の擦り傷を見る透。インターホンが鳴る。透、ドアの方を見た後、部屋でくしゃくしゃになっている滞納書類に目をやる。居留守を使おうと座り込んだところに、明里の声がする。

明里「透ーいない？」

透、明里だとわかって慌ててドアに向かう。その後、傷を隠そうと、部屋に戻って古いジャケットを引っ張り出して、ドアを開ける。

明里「やっほ」

透「おう。どうした。突然。店になんか忘れてたか？」

明里「いや、そうじゃないんだけどさ、お邪魔していい？」

透「いい、けど……」

明里、部屋に入る。片手にはビニール袋がある。

明里「旦那にはちゃんと言ってあるから」

透「いや、そうじゃなくて、それも大事だけどさ、準備してねえから何もねえぞ……」

明里、キッチンに持っていたビニール袋を置く。

透、ガラクタをよけつつ、不審そうに明里を見る。

明里「肘は大丈夫？」

透「肘？　大丈夫だよ」

明里「そう？　一応薬持ってきたんだけど」

明里、透の方に絆創膏を持ってくる。カメラ、それをアップ。その後透の驚く表情に切り替え。

透「え……あ、マジかよ。お前ら一緒だったか」

明里「全然覚えてないの？」

透「ああ。じゃあ、あの水も明里が買ってくれたのか。すまん」

明里「ふふ。しばらくお酒は控えないとね。ほら、腕出して」

透「自分で貼るわ！　３０手前のおっさんになにを……」

透、明里を見る。ちょっと寂しそうな顔。

透「お、お願いします」

透、ジャケットを取って腕を差し出す。明里、微笑んで絆創膏を貼る。一連の下りはギャグパートなので、大げさにやってよい。

透「わりいな。いくらだった？　払うよ。えっと……」

透、部屋から財布を出して、開ける。100円くらいしか入ってない。頭をかく。明里側から映す。

明里「いいよ。でも、仕事探さないとね」

透「それも知られてたか。どこまで話したんだよ。クソ～」

明里、微笑んで、空いたビニール袋に空き缶を詰め始める。透、明里を制止しようとする。

透「い、いいって。自分でやるよ」

明里「これからね、毎週交代で、透の手伝いをすることにしたから」

透「手伝い？」

明里「そう。就職とか、いろいろ手伝うから。だから、透も頑張って」

透も馬券を寄せ集めながら、言葉を返す。

透「え、ちょっと……待っ……話が見えな……」

明里、透の馬券も取る。

明里「競馬も終わるまでは禁止ね」

透「お、おい。待ってくれ。せめて次の宝塚記念くらいは」

明里「ダメ」

明里、馬券を捨て、競馬新聞もまとめる。

透はずっと「GⅠレースもダメとかどうかしてる」「今年は２連覇ありうるドラポンジダンダが最高に熱い」とか愚痴っている。

明里、片付けの過程で、婚約指輪のケースを見つける。

明里「あ、透……なんだもう、水くさいなあ。彼女いるんじゃんー。飲み会では一人じゃ人生長すぎるとか言って……」

透「あ、それは……」

透、制止しようとする。明里、ケースを開けて、ハッとする。

短い回想系のSE/サントラ挿入

カメラ、指輪ケースをアップで映す。透、それを取り上げる。明里の手だけ映る。

透「……マサの」

明里「……ずっと、持っててくれたんだ」

片付けを続ける透の肩から、感謝の気持ちになる明里を引き、見上げアングルで映す。

透「……ああ」

明里「ありがとう」

透「おめえがこれ持ってずっと泣いてるから、鬱陶しかっただけだよ」

透、照れくさくて吐き捨てるように言う。

明里「ううん。そうじゃないよ。『こんなもん持ってたら嫁に行けない』って、ギターと一緒に透が預かってくれた。ちゃんと覚えてる」

透、言われて、いったん目をそらし、息をつく。表情を映す。ギターに話をそらす。部屋のギターも映す。

透「……覚えてないな。ギターに関しては、折半で買ったもんだしな」

明里「２人揃って、頑張ってたもんね、曲作り。マサと透がさ、並んで歌ってるの、好きだったな」

明里、ギターを取る。小さく鳴らす。ちゃんとチューニングが合ってることで、今も大切に弾いていることを示唆する。MDも映せたらよい。

明里、少し憂いを帯びた表情でギターを見つめる。

明里「私ね、最近ちょっと寂しかったんだ。なんとなく」

透「旦那までいてよく言うぜ」

明里「それは、そうなんだけどさ……なんか……このままでいいのかなって」

透が「ふーん、色々あるんだな」

明里、ほほえんで透の方を向く。

明里「だから嬉しかった。透に久々に会えて。マサがまた私たちを会わせてくれたんだね」

透「……そうだな。あいつも大概おせっかいなやつだったからな」

明里「私たちが、力になるから。マサならそうしたと思う」

透、くすぐったくなってギターを取り戻す。

透「弾けねえのにベタベタ触るな！　はは……悪いな……まず、片付けるんだよな？　よし、やるか」

明里「うん！」

引きで片付けを撮り、暗転。

## シーン１０

|  |
| --- |
| 日中-透の家 |

夏に変わっていく景色を映す。深い緑とか。

健太、ギターを鳴らす。Fコードを押さえているつもりだが、ちゃんと鳴ってない。

健太「じゃらーん」

健太の頭を、丸めた紙で早希が叩く。

早希「働け！」

透「お、おい。俺の力作でなにすんだ」

透、くしゃくしゃになった履歴書を取り上げる。

早希「趣味・特技、競馬は絶対ダメ！」

透「じ、事実だし……」

早希「あんたまさか先週明里とネットで応募したとこのESにも競馬とか書いてないでしょうね」

透「……『採用担当が競馬好きかもしれないし』ってよ。明里が…」

早希「書いたの！？」

健太「僕は明里の言うことにも一理あるとおもいます！！」

早希「はぁ……バカしかいないのほんと……こういうのは心象が大事だから。ギターとか、読書とか書いて、ほら」

透、早希に指示されつつ、PCで書き直させられる。

健太、ギターを立てかけて、求人誌を開く。

健太「リストアップしたのって、事務系とか営業補佐系ばっかりだよね。あんまり透がやるイメージが……」

早希「資格とか経験がないと、どうしてもね。接客系もちょっとは入れてるよ」

透「うーんどうだ、こんなんか？　こんなんだろう！　どうだ？」

透、修正した履歴書を見せる。

早希、少し見てから、うなずく。

早希「許容範囲かな。何ヶ所かは書面で郵送だから、印刷しよ」

透「コンビニに行かねえとな。すまんな。パソコンまで貸してもらって」

早希「PCもスマホもろくに動かないって聞いてたからね」

早希、透からPC操作を渡してもらい、コンビニプリントを注文する。

透「スマホは動くには動くんだが、８年前のだからな。バッテリーが終わってて」

健太「電話取るの大変そうだったら、ぼくの携帯電話番号入れる？」

透「その方がいいかもしれん」

早希「あー、もう、そういうのは先に言ってよ。修正してプリント注文やり直さなきゃ」

## シーン１１

|  |
| --- |
| 日中-道 |

通りを歩く健太と早希。

早希「はあ、なんで健太まで来てんのよ。あんたは来週でしょ」

健太「大丈夫。来週も来るから」

早希「物好きなことで」

健太「早希もなんだかんだ優しいよね。ひょっとしたら今日来ないかと思ってた」

早希「優しさとかじゃないよ。久々にトモダチごっこがしたくなっただけ」

健太「またまたー」

二人、歩く。しばしの沈黙。

健太「あとさ、８月の東京都交響楽団のコンサートチケットが手元にあってさ、一緒にどうかなって」

早希「クラシック興味ない」

健太「聞いてみるといいもんだよ。ラフ２の第２楽章は涙を禁じ得ない……あと……」

二人、角にさしかかる。早希が止まるので、健太も言葉を止める。

早希「じゃあ、私履歴書印刷してくる。健太は写真屋に透の証明写真取りに行ってよ。もうできてるはずだから」

健太「わかった！」

早希はコンビニに入り、健太は町の中心部へ向かう。

##  シーン１２

|  |
| --- |
| 日中（夕方でも問題なし）-透の家 |

透、家でギターを弾いている。ポストに封筒が投函される音がする。透、立ち上がって玄関に向かう。ポストを開けると、４通の封筒が入っていて、それを手に取る。

透「思ったより早いな。没か」

透、部屋に戻ってギターを抱え、指輪ケースを手に取って呟く。

透「マサ、クズ過ぎてみんなに手伝わせちゃってるよ。どうしようもねえよなあ」

透、ジャケットからタバコを取る。くわえるが、止める。

透「そういえば、昔のこといろいろ思い出してさ、久々にあの曲を弾いたよ」

透、部屋の『未完成』MDを手に取って、感傷に浸る。

部屋のドアが開く。

早希「帰ったよー。ほら、履歴書」

透、MDを机に放って、早希の方を向く。

透「おお、すまねえ」

早希「ぼけっとしてる場合じゃないでしょー。ネットの方は応募終わった？」

透「あらかた、な」

早希、机の上の封筒に気づく。

早希「あ、先週のやつもう何個か着てるじゃん」

透「早すぎる。こういうのはダメなパターンだ。何回か経験してる」

早希、「決めつけない」と言って封筒を取る。手際よく開封、中身を見る。ため息。

透「ほらな」

早希「まあここは倍率高いから」

早希、透に紙を渡す。カメラ、お祈り文書を映す。読み上げる透。

透「『誠に残念ではございますが、今回はご期待に添いかねる結果となりました。大変申し訳ございませんが、ご了承くださいますようお願い申し上げます』、申し訳ねえと思ってんなら金券でもよこせってんだ」

早希は無言で２通目、３通目と開けていく。お祈り文が透の手に渡される。

透「覚悟はしてたが、いざこうやって来ると、いい気持ちはしねえな」

早希「まあ結果が来るだけいいよ。最近はサイレントお祈りって言って、なにも言ってこない会社もあるくらいだから」

早希、４通目を開け、「あっ」と声を上げる。

透、顔をもたげる。

早希「通ってるよ。レジデッキー。志望度低い接客業ではあるけど、ここの正社員は最初から管理系の仕事らしいから」

透「マジか！」

早希「明里の名文に感謝だね」

ドアの開く音。健太も帰ってくる。

健太「写真できてたよー。あとさ、就活用に、落ち着いた色のネクタイも買ってきた」

透「おお！　健太。さんきゅ。早速使わせてもらうことになる」

健太「え、ということは？」

早希、１次面接のご案内の紙を健太の顔に突きつける。

喜ぶ三人。

嬉しそうな感じのサントラ開始。

音声はなしで、引きで撮影。あからさまにネクタイ振り回す健太とか出せると後のシーンに映像かけやすい。

## シーン１３

|  |
| --- |
| 夜-明里の家 |

明里、家で皿を洗っている。

寝転がってスマホで映画を見ている夫。

夫「あー、ありがと」

明里「たまにはやってね」

夫「ごめんごめん。明日は」

明里「その明日がきた試しがないもん」

明里、ため息をつく。その時、早希から電話がかかってくる。早希と話すテンションが明らかに夫と異なる。

明里「やっほー。どう？　うん、うん。え、あそこ通ったの？　すごーい」

盛り上がる明里。ビビる夫。

うれしそうな明里をアップ。暗転。

サントラ終了。

## シーン１４

|  |
| --- |
| 日中-オフィス街 |

オフィス街の外れ（神田くらいのイメージ）、ネクタイを締めなおす透（健太がくれたやつ）。靴も新しい革靴。

透「いよいよかー」

そこに、ガラの悪そうな透の先輩、剛が通りかかる。透に気づいて、背中を小突く。

剛「あれ？とーるぅ！何だよ背広なんて着て」

透、驚く。申し訳ない感じで応答。

透「あ、剛さん……すみません今月返す分の金……」

剛「おー、まぁ頑張ってるみたいだし（服装を見る感じ）、厳しそうならちょっと待ってやるよ」

透「すんません……」

剛「お前なりに精一杯誠意見せようってんだろ？シューカツ、応援してるぜ？」

透「ほんとすんません。恩に着ます。」

剛「決まったらまた教えてくれや。じゃ。」

剛、歩き去る。透、頭を下げて見送った後、慣れない歩き方で、ビルに入っていく。

## シーン１５

|  |
| --- |
| 時間不問-会議室 |

会社の会議室。面接官が２人いるところ、１人しか座っていない。時間を気にする面接官。

ドアのノックに気づく。

面接官「ああ、来ちゃった……どうぞー」

透「失礼します」

部屋に入ってくる透を、面接官の後ろ側から映す。

面接官A「どうぞ、かけてください」

透、無言で椅子に座る。

透「よろしくお願いします」

面接官A「こちらこそ。一次面接を担当します藤田と申します」

透「黒川透です」

面接官A「まずは自己紹介をお願いします」

透が深呼吸をして、面接官と目を合わすのをアップで撮影。

透「……はい。自分は」

画面、暗転。

透、面接官と競馬の話で盛り上がっている。

透「そうなんですよ！　ドラポンジダンダが強いのは左回りなんです！　さすが！」

面接官A「前回は特に苦手なコースでしたからね。あれで不調とみなすのはにわかですよ。まったく……」

面接官A、競馬トークで盛り上がり、笑顔。

そこでドアがノックされる。

面接官A「ああ、来た。すみませんね。もう１名の担当者が遅れておりまして」

透「いえいえ」

部屋にもう１人の面接官Bが入ってくる。

面接官B、透を一瞥し、面接官の席に座る。

面接官B「遅くなり失礼いたしました。 人事部の須藤と申します 」

透「黒川です。よろしくお願いします」

面接官B、会釈すると、「少々失礼します 」と言い、面接官Aに耳打ちする。面接官Aの表情が変わる。

透、怪訝そうに見守る。面接官Aが「うーん」と言う。

透「す、すみません。応募書類に不備でもありましたでしょうか？」

面接官A「あ、いや、ね、そういうわけではないんですが」

面接官A、言いづらそうにしたあと、意を決して言う。

面接官A「いや、黒川さん、弊社が最近、キヨスミを買収したのをご存じですか」

透「は、はい。御社の戦略的成長を実感しました」

面接官A「ありがとうございます。それでですね、その、キヨスミのデータベースに、黒川さんの名前がありまして」

透、息をのむ。

面接官A「アルバイトをされていたころのですね、パフォーマンスと言いますか、あまり芳しくないと」

透、愕然とする。なんとか細い声で言葉をつなぐ。

透「は、はい。正直そのころは、未熟者でして……シフト通りに動けないことがありました。で、ですが、今は心を入れ替えまして、その……」

面接官AとB、目を合わせる。面接官B、口を開く。

面接官B「黒川さんのお気持ちはわかりました。では、弊社で検討しまして、選考結果は後程、書面にてお送りさせていただきます」

面接官A「すみませんね。時間がきてしまって。面接はこれで終了です。お疲れさまでした」

透、立ち上がる。

透「ありがとうございました。失礼します……」

画面、暗転。

## シーン１６

|  |
| --- |
| 夕方以降-透の家 |

透、家でギターを弾いている。

インターホンが鳴る。透が「開いてるぞ」と言うと、健太がドアを開けて入ってくる。

健太「やあやあ」

透「よう」

健太、部屋に放り出された背広を見る。

健太「さっきさ、ヒノタ食品から電話がきて。その……」

言いよどむ健太を見て、透は察する。

透「その顔を見りゃ言わなくてもわかるよ」

健太「め、面接はどうだった……？」

透、首を横に振る。健太も肩を落とす。

健太、机上のMDに目をやる。

健太「……ところで……それMD？」

透「ああ、これか」

透、MDを手に取る。マジックペンで「未完成」と書かれている。

透「昔、マサと一緒に作った曲だよ」

健太「完成してないの？　それとも、そういうタイトル？」

透「そういうタイトルだ。変だろ」

透、健太にMDを渡す。健太、首を振る。

健太「いや、そんなことないよ。シューベルトの交響曲にも『未完成』ってタイトルで親しまれてるものがあるから」

透「そういや、マサもそんなこと言ってたな」

健太「せっかくだしさ、これもどっかに応募してみたら？　ダビングしてあげるよ」

透「音楽か……悪くないよな」

透、初めて笑みを見せる。健太も勇気づけられたと思い、嬉しそうにMDを抱きしめる。

健太「ねえ、弾いてみてよ」

透、うなずく。

透「家だとうるさくなるから、外行こう」

画面、暗転。

## シーン１７

|  |
| --- |
| 夜-河川敷 |

夜の河川敷、遠景カットで、２人がシルエットで映る。地面に腰掛ける。

健太、透のギターを見つめる。

健太「その赤いギター、なんか名前があったよね」

透「『ベテルギウス』。これもマサが名付けた」

透、チューニングをする。

健太「赤い星だもんね。洒落てるなあ」

透「そう思うだろ。でもよ、後でその語源を調べて、笑ったよ。なんって意味だと思う？」

健太「え、なになに？」

透「『脇の下』、だってさ。ははは」

健太「えええ」

２人、笑う。

透「それじゃ、脇の音色を楽しんでくれ。『未完成』」

透、ギターを鳴らす。画面、暗転。

## シーン１８

|  |
| --- |
| 日中-明里の家 |

家で明里と夫が話している。夫側はPCで仕事をずっとしている。

夫「えー、そうかー。最近出てたのはそういうわけなんだ」

明里「うん。でも、なかなか上手くいかなくてね」

夫「そりゃそうだよ。高校中退で、ずっとフリーターだった人なんでしょ？　いきなり就活は無理があるって」

明里「そう言ったらそうだけどさ。やっぱ助けてあげたいじゃん」

夫、PCを閉じてなにか言おうとするも、口をつぐむ。明里、イライラして尋ねる。

明里「なに？　言いたいことがある雰囲気だけ出して待ちの姿勢でいるのやめてよ」

夫「いや、さ。俺も明里も、大学行って、就職して、結婚して、わりと順調に人生を歩いてきたわけじゃん」

明里「まあそう言えばそうだけど、それで？」

夫「そういう俺らがさ、俺らの感覚で、その、透さんだっけ？みたいな人に一方的に手を差し伸べるのは、どうかって思うんだよ」

明里「助けるなって言うの？」

明里、ムキな表情に変わる。夫、居心地が悪くなってキッチンに飲み物を取りに行きながら話す。

夫「そうじゃないけどさ、その、生きてきた環境とか、能力とかでさ、人の住む世界は違うってことが言いたいんだ」

明里「……なんとなくわかった。透にはフリーター人生が合ってるって言いたいのね」

夫「そう言うと角が立つけどさ。俺らと同じ生き方はできないんだよ。その人はさ」

明里、腹が立って立ち上がる。

明里「なにその傲った考え方。どんな人にだってチャンスはあるはずだよ」

夫、そろそろ議論できる空気ではないと察し、机に戻ってPCを開き目をそらしながら受け答えをする。

夫「たしかにそうかもね」

明里、その夫の姿を見て、呆れる。

明里「透は大丈夫。芯があるし、ちゃんと家事だってできる人なんだから。行ってくる」

明里、家を出る。ドアの閉まる音。

夫、ため息をつき、目をつむって、こめかみを撫でる。

## シーン１９

|  |
| --- |
| 日中か夕方-公園 |

明里、公園の側を歩いている。早希の声に気づく。

早希「信じらんない」

公園で楽曲応募用の封筒を健太に突き返す早希。健太は不満げな表情を浮かべ、受け取らない。ベンチか、個人的にブランコが好き。

健太「いいじゃん。ちょっと応募するくらい」

早希「受かるわけないじゃない。今はこんなことに時間を割いている場合じゃないでしょ」

健太「『こんなこと』って……夢は必要なものだよ。もう何週間も、透はお祈りメールばっかり読み続けているんだから」

早希「だからよ」

健太「え」

早希、ため息をついて封筒を持ち直す。

早希「ねえ、健太はさ」

健太「うん」

早希「これからもずっと、どっちかが死ぬまで透の面倒を見続けるわけ？　そんなことできっこないでしょ」

健太「そ、それは……無理だけど」

健太、うつむく。早希は頷く。

早希「そうだよね。だから透は、透の足で歩かなきゃならないの。私たちはその手伝いをしているの。余計なお節介で迷走させて、後で馬鹿を見るのは透なんだよ」

明里にカットを移す。息を呑む。２つの出来事が続いたことで、自分の安い手助けを少し反省する。

透「はっはっは。相変わらず痴話喧嘩が激しいな」

透の声に振り返ると、明里の後ろに透がいる。

明里「と、透！」

透はしーっと指を立て、家の方に向かっていく。明里も付いていく。

## シーン２０

|  |
| --- |
| シーン19依存-透の家 |

家で腰を下ろす透。隣に座る明里。

明里「ごめん」

透「なんで謝るんだよ」

明里「……余計なお節介だったら、よくないなって。透の気持ち、ちゃんと聞かないで突っ走っちゃったから」

透、明里を見つめる。ほほえむ。指輪ケースを手に取る。

透「相変わらず優しいな。マサはそういうところが好きだったんだろうな」

明里、うつむく。指輪のことが気にかかる。指輪越しに１度明里を映す。

明里「優しくなんかなかったよ……あの時は」

夫「え？」

明里「……いや、なんでもない」

透、間を置いてつぶやく。

透「……あいつがちゃんとプロポーズしてたら、どうなってたろうな」

明里「なんでそんな話するの」

透「喧嘩した後は腕を組む癖があるって、マサがよく言ってた。旦那ともめたか」

透、明里を見る。

明里、ビクッとして目をそらす。

透「わかりやすいな。まあいいや。謝らなくてもいいよ。俺さ」

透、指輪を置いて、明里に向き直る。

透「ずっと人生で置いてけぼり食らってる感じがしてたんだ。だから最初、お前らに会うのが怖かった。でも、今はありがたいと思ってる」

透、力なく笑う。明里、うつむいて、鞄から結婚指輪を出し、見つめながら話す。

明里「その焦りはわかるよ……私もずっと、人生で置いてけぼりになるのが怖かった。就職も、結婚も、そうやって急いできた。でもそれが正解だったのか、今はわかんない」

透、明里をしばらく見守ってから立ち上がり、机の上の封筒を持ち上げる。

透「急がなきゃならんときもある。はは。今の俺もそうだ。実を言うとな、もういよいよ金がない。健太がいろんな免除やら保障やらを繋いでくれたが、来月にはゲームオーバーだ。先輩から金も借りてるしな」

明里、それを聞いて焦りの表情を浮かべる。カメラ、明里を映す。

透「だから、この応募がダメだったら、いったんこの就職活動は終わりにさせてくれ。たしかに健太の言うとおり、俺はやっぱり音楽が好きだ。健太が音楽関係の求人もいくつか入れてくれてな。ちゃんと本腰入れて臨むから、な」

明里、黙って頷く。透も頷く。

# 第３幕

|  |
| --- |
| 第３幕は7月ごろ想定。基本同じ服装でそろえてほしい。 |

## シーン２１

|  |
| --- |
| カットによる |

サウトラ開始。どんどん闇に落ちていくので、切なめとか暗めイメージ。

* 封筒をポストに入れる透
* カレンダーにある面接予定日
* 面接を受ける透
* スマートフォンでお祈りメールを読む透
* スーツで街を歩く透
* 首を振る面接官
* カレンダーにある面接予定日に×
* 透を励ます健太
* 面接を受ける透２
* カレンダーにある面接予定日に×
* 通知を受けて落ち込む明里
* 早希と模擬面接をする透
* 空白のカレンダー
* 日経新聞で業界予習をする透
* 俯きながら死んだ目で歩いて行く透（引き、アップ両方）

この辺で面接官の非情な音声を入れていく。「うちには合わないかもねえ」「未経験の人は難しいかなあ」「少し転職回数が多すぎるような気が……」「学部を出てない場合は、同等の職務経験が必要でして」「今回は、残念ですが」

画面、暗転。

## シーン２２

|  |
| --- |
| 日中-都心の公園 |

真夏の都会を映す。蝉の声も入れられると良い。昼、都内の公園にいる透。スーツを着用。暑そう。

透「ふう……あっつ」

透、自動販売機で水を買う。近くのベンチに腰掛ける。その時、公園の若者の会話が聞こえる。

若者「高橋さん、セギヌスに内々定出たらしいよ！」

若者２「ええ。すごーい。こないだアルメニアに支社作ったとこでしょ」

若者「そうそう。マジで右肩上がりらしいよ。研修も手厚いんだって」

若者２「うらやましいなあ」

透、落ち込んで渋い顔で若者を見送る。不安で足を刻むのを横から撮影。透、MDを出して、見つめる。

透「マサ、俺、どうなっちまうのかな……」

街のチャイムが鳴り、顔を上げる。

透、ため息をつく。腕時計を見て、「時間だ」とつぶやき、立ち上がる。暗転。

##

## シーン２３

|  |
| --- |
| 時間不問-会議室 |

面接官の声だけ先に入れる。

面接官「いいですね。経験がないのは惜しいですが、熱意は伝わりました」

驚く透の顔を映す。

笑顔の面接官を映す。

透「ほんと、ですか」

面接官「ええ。弊社が重視するのはパッションです。人事部に持ち帰るので今日すぐにお答えはできませんが、前向きに検討させていただきます」

透「あ、ありがとうございます！」

暗転

## シーン２４

|  |
| --- |
| 日中-河川敷 |

透、河川敷に腰掛けている。早希が通りかかり、声をかける。

早希「よ」

透「おお、早希か。どうせまたお祈りのお知らせだろ。あの、松木の子会社の」

早希「察しがいいね」

透「残り、２社か。こりゃ、バイト路線かなあ」

早希、ほほえんで、透の隣に座る。

早希「今日の面接どうだった？」

透「それがさ、結構感触良かったんだ」

早希「ほんとに！？　最後の２社でついに善戦！」

透「これで受かったら初給料で一杯奢るよ」

早希「期待しないで待ってる」

しばらくの沈黙。

透、早希を不思議そうに見る。

透「どうした」

早希「ん？」

透「今日は健太が来る日だろ」

早希「ああ、あいつは今買い出しに行かせてるから」

透「買い出し？」

早希「慰労会しようって。買い出ししてくれたら、コンサート一緒に行くの考えてあげるって言ったら、飛んでった」

透「まったく……どうせ行く気ねえくせに。あんまりあいつの純情をもてあそぶなよ」

早希「気をつける……その、２人で会ってさ、謝りたくて」

透「……謝る？」

早希、立ち上がって透に向き合う。

早希「音楽のこと、『受かるわけない』とか言って、ごめん」

透「ああ、明里に聞いたか。こっちこそ盗み聞きして悪かった。聞こえたもんで」

カメラ、引きで２人を映す。

早希「透の音楽がダメだって言いたいわけじゃなかったの。健太の脳内お花畑に嫌気がさしちゃって」

透「お前の言ったことは正しいよ。気にすんな」

透、立ち上がって家の方に歩き始める。早希も一緒に歩く。

引きで歩く二人を撮影。

透「健太、ガチもんの夢追い人だよな」

早希「ほんと、時々イライラする」

透「ははは」

早希「ちょっとだけ羨ましくもある」

透「羨ましい？」

早希「自分で言うのはなんだけどさ、私、健太よりずっと賢いと思うし、健太のしてない努力もたくさんしてきたと思う」

透「間違いないね」

早希「私の方が稼ぎもいい！」

透「さすがだ」

早希「……でも、私は今全然幸せじゃない。健太の方がずっと幸せそうに見える。健太の何倍も努力して、ちゃんと現実にも向き合ってきたのに」

透「……」

透、立ち止まる。早希、透に振り向く。

透のカット。

透「お前は、お前が思ってるほど、非情でもリアリストでもないと思う」

早希のアップを映す。

透「お前は、ちょっとだけ人生に疲れて、人間に絶望しかかってただけだ。大丈夫。いつか必ず幸せんなる」

早希、しばらく間を置いて、頷いて、ほほえむ。

## シーン２５

|  |
| --- |
| 日中-透の家 |

家に帰ってくる透と早希、すでにそこには健太がいる。

健太「おー帰ってきた！　待ってたよー。もう、わけわからない料理の献立渡すから、大変だったよ」

透と早希、笑う。

早希「由緒あるトルコ料理だよ。わけわかんないとか言わない」

早希、キッチンで手を洗う。

透、ビニール袋を覗いて、言う。

透「おー、これは、もしかしてパトゥルジャン・イマム・バユルドゥかな」

早希「ご名答」

健太、目を丸くする。

健太「え、マジで！？　なに！？　知らないぼくがおかしいの？　え？　絶対マイナーだよね、ねえ」

当惑する健太を見ながら笑う二人。

早希「さて、料理を始めますか」

—暗転をはさむ---

パトゥルジャン・イマム・バユルドゥを食す３人。

透「実を言うとさ、最初お前らにはそんなに会いたくなかったんだ」

早希「はは。明里に聞いたよ」

透「でも、お前らにも悩みやら問題やらそれぞれあって、少しだけ安心したよ」

健太「悩みのない人なんていないよ。透は１人じゃない」

早希「よくそういうセリフをストレートに言えるよね」

透、笑う。

透「よく考えたら、俺は運が良かった。俺はよ」

透を見る健太を映す。話続ける透。

透「お前らに再会しなかったら、このままダラダラ生きて、借金抱えたままジジイになって、死ぬだけだった。その間、誰も俺の人生なんて気にしやしない。でも、お前らに会った。お前らに会って、再起をかけて活動したこの期間、この数ヶ月間だけは、俺の人生にはちゃんと証人がいるんだ。それが嬉しいんだ」

３人の顔アップ。早希、料理を切る（なんか作業できればいいや。手を拭くとかでもいい）。

そのタイミングで、ポストに郵便物が投函される音がする。

振り向く３人。暗転。

## シーン２６

|  |
| --- |
| 夜-居酒屋２ |

店で飲んでいる３人―明里、早希、健太。

開いた封筒とお祈り書面を映す。

憂いを帯びた表情の明里を映す。

明里「の、残りは？」

健太「１社、だね……つ、追加でエントリーする？」

早希「もう間に合わないよ。祈るしかないよ」

明里「そうだね……全然助けになれなかった」

健太「……」

うつむく２人。早希、酒を飲んで口を開く。

早希「しおれてても仕方ないでしょ。まだ１社、１社残ってるんだから。私たちにできるのは透を信じること」

健太、頷く。

明里「……そうだね」

健太「受かったら、これからどうする？」

明里「それなんだけどさ」

明里、間を置いて切り出す。

明里「この後はまた、透のしたいように、させてあげるべきだと思ってる。私たちも自分の人生に、やるべきことがたくさんあるし」

早希「……明里、成長したねえ」

明里「成長、なのかな。わからないけどね」

明里、苦笑いをする

健太「そういう早希も変わったと思う」

早希「私が？」

健太「うん。マサがいなくなる前の早希に戻った気がする。少し前の早希なら"まだ"1社残ってるなんて言い方しなかったよ」

早希「それは…（照れ隠し＆いつもの調子で言い返そうとして言いよどむ）」

健太「みんなは早希のことリアリストだって言うけど、僕には諦めてるように見えてた。最初から抗うことをやめるみたいに…」

健太「だから、代わりに僕が抗おうと思った。それで、幸せになれる道もあるんだって。諦めないから繋がる道もあるんだってこと、早希に見せたかった」

ここで健太喋りすぎたことが急に恥ずかしくなる

健太「ごめん、飲み過ぎたみたい。トイレ行ってくる」

健太がトイレに発ってしばらく後に早希は深く息をつく。

早希「悩みとは無縁のやつって思ってたけど、あいつなりに色々考えてたのね」

明里「いやあ、ここまで想われてるところを見せつけられると、なんか妬けちゃうね」

早希「茶化さないでよ、こんな公衆の面前で、、、ただでさえ恥ずかしくて死にそうなんだから！」

明里「アハハ、ごめん」

早希、小声で「全くあのバカは」と呟きながら自分のワインを注ぐ。

健太、トイレから戻ってくる。

まだ場が沈黙しているため、気まずさからワインを飲もうとする

早希、黙って杯を掲げる。

健太「お」

健太も即座に状況を理解し、明里とアイコンタクトを取り、自分のグラスを持ち上げる。明里もニッと笑ってすぐに自分のグラスを持つ。

早希「きっと、うまくいく。透の成功を祈って」

３人、頷いて乾杯をする

グラスを映して、暗転。

# 第４幕

|  |
| --- |
| 第４幕は8月上旬設定。すべて同日であるため、服装統一厳守。 |

## シーン２７

|  |
| --- |
| 夜-明里の家 |

真っ暗な画面でLINEの通知音が鳴る。

ぼんやりとしたブラーから、皿を洗っている夫を映す。

夫「来ないと言ってた『明日』がきたぞ、明里」

明里「たまに家事したくらいで偉そうにしないで。こっちは毎日やってたんだから」

夫「ごめんって。繁忙期が一段落したからさ」

夫、皿を立てる。そのまま座っている明里のもとに移動する。

夫「あと、こないだは悪かった。言葉が過ぎた」

明里「いいよ。的を射てたし」

明里を見守る夫。明里、伏せて続ける。

明里「やればできるなんて言い聞かせて、何ヶ月も振り回して、結局、なにも残んなかった」

夫、明里の髪を撫でる。

切ない系サントラ開始

夫「明里は頑張ったよ」

目を赤くした明里が顔をもたげる。細い声で返す。

明里「……こういう時だけ優しくしないで」

夫、微笑む。

夫「でも、悪い気分じゃないだろ」

明里「……」

黙ってうなずいて、夫の方に寄りかかる明里。

夫「たぶん、その人も同じ気持ちだったんじゃないかな」

明里「同じ？」

夫「自分を思ってくれる人がいる、って、それだけでも嬉しいもんだよ。明里はきっと、その人を勇気づけたと思う」

明里、起き上がり涙を拭く。カメラを引きに切り替える。

明里「やり方は、間違ってた」

夫「……それでも、たしかに救おうと思った。だろ？」

明里、頷く。カメラ、以後交互に映す。

夫「……会ってきたら」

明里「うん」

夫「行ってらっしゃい」

明里「ありがとう」

明里、そのまま家を出る。

サントラ終了

##  シーン２８

|  |
| --- |
| 夜-透の家、およびその前の通り |

明里、透家の前の通りを歩く。

透の家のドアノブを映す。そのままカメラを上げて、明里の表情を映す。明里、ドアをノックする。

中から透の「開いてるよ」という声が聞こえる。ドアを開ける。

家の中から入ってくる明里を映す。少し悲しそうな顔になる明里。そのまま引きで、酒を飲む透を映す。すでにだいぶ酔っている。部屋のカップ酒を映す。

透「ったく、こうなるなら端っから前向きに検討しますなんて言うなよなあ」

明里「……ほんとだよね」

明里、透の隣に座る。

透「頑張ってくれたのにすまねえな」

明里「こっちこそごめん。全然力になれなかった」

透、明里と乾杯する。

透「なあに、また元の生活に戻るだけだ」

明里「今日は仕方ないけど、身体には気をつけてね」

透「任せろ。次のスプリンターズステークスですべてが変わる」

明里「……もう」

透「それまでは、まかない暮らしだけどな」

透、立ち上がって次の酒を取る。

明里、部屋にある指輪ケースを手に取る。しばらく考えてから、透の方を向いて口を開く。

明里「……この指輪、売ってもいいよ」

透「ダメだ」

透、低い声で短く答える。その後、元のトーンで続ける。

透「それは、マサがお前に渡すはずだったものだ」

透、明里を見る。明里、やや唇を震わせながら、息を吸って言う。

明里「……違うの」

透「え」

明里「あの事故の前、実は、私、マサにプロポーズされてたの。でも私、『まだ高校生だから』って、お断りしちゃった」

サントライン

透、目を丸くする。明里、次第に涙声になっていく。

明里「その後、すぐあの事故が起きて……なんであのとき、ちゃんと受け止めてあげなかったのかなって……辛くて。それを透が、預かってくれたの。私、すごい自分勝手だった。言ってなくてごめんね」

明里泣き出す。透、酒を置き、うろたえながら答える。

透「そうだったのか……おらぁ、てっきり……」

明里「そう。だから、いいよ。私のために取っておかなくて。透がほんとに苦しくなったら、この指輪……」

透、酒をあおる。

透「ちょっと、頭冷やしてくる。すぐ戻るから、待っててくれ」

明里「わかった」

透、そのまま部屋を出る。明里、部屋に座って、空き瓶を片付ける。

街の夜景を映す。

## シーン２９

|  |
| --- |
| 夜道 |

酔っ払って街を歩く透。

透「まさかなあ……うぃっく」

透、ポケットからMDを出して、夜空を見る。

透「マサ……お前はつくづく不憫なやつだなあ」

ブツブツ言いながらよろめいて歩く。その間にMDをしまう。

角を曲がるときに、剛と出くわす。剛、驚きつつも、肩をつつく。

剛「おー！とーる、元気かぁ。就活はうまくいってんのかよ」

透「いや、剛さん……どうも、それが……まだ頑張り中っつうか……」

剛「な〜んだよじゃーどーすんの？そろそろちょっとくらい返してくれないとよ。こっちも困っちゃうわけ。ね？」

透「す、すんません」

剛「つっても酒飲む金くらいはあんだろ？ちったぁ金よこせよ〜」

透のポケットをまさぐる剛

MDをみつける

剛「あ？なんだこれ？」

透「あ、返してください！」

腕に掴みかかり必死に取り返そうとする透。体のバランスが取れず、剛にぶつかるようになってしまう。

剛「いてぇんだよクソが！　こんなガラクタにムキになりやがって！」

透「ガラクタ……それはガラクタじゃないっす！」

剛「口だけは生意気だな。こんなもん後生大事に持ってねぇで少しは誠意ってもん見せろやボケ！」

剛、MDを道に捨て、踏みつぶして去る。

透「あ、ああ……」

透、そのそばにしゃがみ込む。

## シーン３０

|  |
| --- |
| 夜道 |

明里、部屋のドアを開けて、外に出る。

明里「透？　そろそろ風が冷たくなるらしいから……あれ」

透はどこにもいない。

明里、息を呑む。シーン６の泥酔状態がフラッシュバックする。

緊迫したサントラ開始。

明里、慌てて電話をかける。

## シーン３１

|  |
| --- |
| 夜-駅前 |

駅で会う早希と健太。

早希「透、いないって？」

健太「うん。とりあえず一緒に探そう。また転んだりしてないといいけど」

早希「だいぶ飲んでたって言うから」

健太「ああ……もう踏んだり蹴ったりだよ……」

そこで、健太の携帯が鳴る。恐る恐る電話を取る健太。

健太の表情が変わる。

健太「え……」

## シーン３２

|  |
| --- |
| カット依存 |

夜の街を探す明里。何カットか撮影。

その後、道に拾っているカップ酒を発見。やや瓶が割れていて、血痕が付いている。

明里、息を呑む。

透の発言をエコーをかけて流す。

『ずっと人生で置いてけぼり食らってる感じがしてたんだ。だから最初、お前らに会うのが怖かった』

『この数ヶ月間だけは、俺の人生にはちゃんと証人がいるんだ。それが嬉しいんだ』

明里、走る。探す。明里の独白を流す。

明里・独白「」

何カットか明里、早希＆健太の捜索を映す。夜の街も映す。

明里、ついに河川敷沿いの道に透を発見する。走って行く。

緊迫したサントラ終了

## シーン３３

|  |
| --- |
| 夜-河川敷 |

よれよれで歩く透を映す。痣をいくつか追加しておく。

明里、後ろから呼びかける。

明里「透……！」

明里、駆け寄ろうとする。透、怒鳴る。

透「来んな！」

明里「透……」

透、しゃがれた声で言う。

透「もう……もうたくさんだ。もう俺に構わないでくれ」

明里「ごめん。ごめんね」

透「この４ヶ月、お前らの善意はほんとに残酷だったよ……嬉しかった……でも残酷だった」

透、明里に振り向く。少しずつ語気を強めながら話していく。満身創痍なので、各所かばいながら。

透「酒と博打を取ったら、もう俺の人生、なんにも残っちゃいねえんだ。俺はそういう人間なんだよ。だから……変な夢見させて落とすのは、やめてくれ……」

明里「そんなことないよ。透の人生にはもっといろんなものがある。これまでも、これからも」

明里、少しずつ近づく。

明里「怪我してる。帰ろ？　手当しなきゃ」

## シーン３４

|  |
| --- |
| 夜道 |

捜索をしている早希、健太。透の２度目の「来んな！」という声が小さく聞こえ、振り向く。２人、お互いに頷き、走って行く。

## シーン３５

|  |
| --- |
| 夜-河川敷 |

透「エリートのお節介は、もうこりごりだ……」

明里「（少し間を置いて）エリートとか関係ないよ……友だちだから！　友だちとして、同じ人間同士として、心配するんだよ。そんなボロボロのまま、放っておけな……」

透、明里に掴みかかる（腕を掴むとかでいい）。身体が痛くて、膝をつく。透、怒鳴り散らす。

透「同じ人間同士だ……？　お前ら全員、いい大学出て、背広着て会社行って、家に帰りゃ旦那が迎えてくれるんだろ。便所の世話なんかしたこともないんだろ。怒鳴られたこともない。殴られたこともない……なんかあったら保険が下りる……俺なんかなあ、その日から文無しだよ。ゴミクズみてえな人生だ……それがどうして同じ人間同士だ……！」

透、立ち上がって走り出す。

透「もう関わってくんな……！」

透、通りに飛び出す。

## シーン３６

|  |
| --- |
| 夜道 |

その時、ヘッドライトの閃光が透を照らす。

早希・健太、その透を捉える。駆け出す。健太は飛び込む勢い。

明里、口元を押さえて立ち付くす。

ブレーキ音のSE。心音のSE開始。

ヘッドライト前に透の足を映す。

透を引きで映す。

ブレーキを踏むカット。

振り返る透。

透の目アップ。

ひっくり返る透の視点カット。仰いで回転させるような形で、スローモーションに編集する。

心音のSE終了。暗転。

ぶつかる音を入れる。

4秒ほど暗い画面。

健太の荒い息を挿入。ブラーで健太と夜空を見上げるような形（透の視線）で映像を入れていく。

目をつぶっていたのを、次第に見開いていく透。健太と目が合う。健太が透の上に覆い被さっているのを引きで撮影。その後、健太の表情にアップ。

健太「ゴミみたいな人生なんて、あっちゃいけないんだよ」

透は黙っている。そこに、運転手の男性の声が入る。

男性「危ねえな！　飛び出すんじゃねえよ」

透、ビックリして上体を上げる。健太も立ち上がる。透が振り向くと、自動車から男性が出てくる。マサにそっくりの人物。

健太が謝る。

健太「すみません！　すみません！」

男性「きぃつけろよ。ったく」

男性は去ろうとする。その後ろ姿を追う透。透の焦点が合っていく。

透「ま、マサ……？」

振り返る男性。クビをかしげる。

男性「あ……？　誰だよマサって」

透「い、いや……なんでもねえっす」

男性「……命拾いしたな。身体大事にしろよ」

男性、車に乗って、立ち去る。駆け寄る明里と早希。

完全に起き上がる透。

透「……」

沈黙している透の肩を、健太が叩く。

健太「透」

透、健太の方を向く。

透「……おう。すまなかったな」

健太「いいって」

透、健太、抱擁を交わす。

早希、微笑んで言う。

早希「肝心なとこで死ぬとこだったよ。ほんとに」

透、目をぱちくりさせる。

透「肝心なとこ……？」

健太、抱擁を解き、言う。

健太「ついさっき、電話が来たんだ。『未完成』、審査通ったんだよ。直接話をさせてほしいって……」

透「え……」

透の驚いた表情をアップ。

透「いや、でもあれは、早希が取り上げたんじゃ……」

一同、早希を見る。早希、腕を組んで目をそらす。

透「マジか……」

健太、笑顔で頷く。明里も感激する。

明里「おめでとう！　すごい！」

健太も一歩下がって拍手しながら「おめでとう」と言う。

早希も「おめでとう」と言う。

透、躊躇いがちな表情から、少しずつ笑顔に変わっていく。

## シーン３７

|  |
| --- |
| 夜-駅前 |

夜の町並みを映す。

早希と健太、駅前に歩いて行く。

早希「かっこよかったよ。決死の救出劇」

健太「あ、ありがとう……」

早希「たまには役に立つじゃん」

健太「ははっ……」

照れる健太。

早希「……私にはあそこで、飛び出す勇気なんてなかった」

健太「ま、まあ無茶だったよね」

早希、笑う。

早希「私、今回わかったよ。たまにはロマンスも悪くないって」

健太「早希……」

駅前に着く二人。早希が手を振る。

早希「コンサート、楽しみにしてる」

早希、駅前に消えていく。

残された健太、嬉しそうに笑って、ぴょんぴょん跳ねる。暗転。

## シーン３８

|  |
| --- |
| 夜-透の家の前の道 |

家まで透を見送る明里。

明里「ほんとに、手当しなくて大丈夫？」

透「ああ、平気だって」

透、安心させるために身体を動かしてみせる。

透「ほらな」

明里「わかった。気をつけてね。あんまり力になれなくってごめん」

透「いいって。俺の方こそ怒鳴って悪かった」

透、立ち止まる。

透「お前、最初うちに来たとき言ってたよな。『寂しかったんだ』って」

明里、頷く。

透「そんなことねえよ。お前にはちゃんと居場所がある。それは、俺のゴミ屋敷じゃねえ」

明里「うん。わかってる。透も、今を生きてね。マサのためでも、私たちのおせっかいな助言通りでもなく」

透「ああ」

透、微笑む。明里も同様。

明里「しばらくお別れだね」

透「なに、少し遅めの卒業式だと思えばいいさ……元気でな」

明里「うん。元気で」

透、家に帰っていく。

明里、自分の結婚指輪を撫でる。

明里、空を見上げる。

明里「元気で」

道をずっと歩いて行く明里を俯瞰で映す。次第に暗転。エンドロール。

# 終章

|  |
| --- |
| 日中-事故現場１ |

歩いている明里の手にしている花束をアップ。

雅之の事故現場に着いた明里。すでに1つだけ花束がある。

明里、花束を見てほほえむ。

立ち去る明里の足をローアングルで映し、カメラしだいに左シフト。道に置かれた2つの花束を映す。元からあった花束には、雅之の婚約指輪が光る。

終。